「総合的な学習」の実践的課題

Problems　of　“Integrated　Study"

川本　治雄
KAWAMOTO Haruo
（和歌山大学教育学部　社会科教育：総合的学習プロジェクト）

抄録　２００１年度および２００２年度の２カ年にわたる総合的学習プロジェクトでの研究では、和歌山市内の総合的な学習の実施状況およびその課題を明らかにし、学びの検討を通して子どもにつけたい力を論議した。この小論では、小学校・中学校・養護学校でのアンケートのうち、とくに和歌山市内小学校でのアンケート調査結果を中心に検討を進めた。

キーワード：「総合的な学習」「学び」「学習環境」「カリキュラム」

１．本プロジェクトの課題と取り組みの経過

２００１年６月、本プロジェクトに関わる研究員・特別研究員の募集を行い、市内の総合的な学習の時間に関わる実施実態調査の有無を調べた。２０００年度から移行期にはいっていたが、総合的に実態調査が行われたことはなく、２０００年度の市内での実施状況を和歌山市内小学校教頭会が教育課程の課題として取り上げ、課題解決のために先進校実践に学ぶというかたちで取り組みが進められていた。

一方、文部科学省の指定校を中心として教育課程の柱に総合的な学習を据え研究を進めている学校も見られたが、多くの学校の動向把握は困難であった。[注1]

また、和歌山大学教育学部・和歌山県教育委員会連携協議会のカリキュラム開発専門委員会（宮永健史委員長）では、総合的な学習の時間における先行実践と理論的検討を行い委員会報告書として「『総合的な学習の時間』のねらいとあり方を検討する－先行的実践報告と理論的検討－」（平成１４年２月刊）をまとめている。

本プロジェクトの２年間の取り組みは、まず、学校における取り組みの現状把握をしようとした。先行調査に当たりながら、０１年度の３月に和歌山市内の小学校・中学校・養護学校を対象に「総合的な学習に関わるアンケート調査」を行った。０２年度４月からの小中学校の新学習指導要領全面実施に備え、各校における取り組みの現状を把握し課題を明らかにするために実施した。次に、総合的な学習における学びのあり方の検討を実践事例を通して行い、「学ぶ」ことの意義について再検討を行った。最後に、多くの課題を提起しながら重点的に取り組みが進められようとしている、総合的な学習の時間における『小学校での英語活動』に焦点を当てたシンポジウムを開催した。

２．アンケート調査の実施

２００２年の学習指導要領全面実施に向けて、小学校・中学校では、「総合的な学習の時間」についての取り組みが進められていた。２００１年度は、移行措置の最終年ということで、来年度に向けての内容の検討や、時間割などに現れる教育課程での位置付けが課題になっている。すべての学校がすべて同じ教育課程で進めるということではなく、「総合的な学習の時間」に象徴されるように、学校の特色づくりと関わる教育課程編成の課題が新たに実践的な問題として生まれている。

また、保護者だけでなく地域の多くの人との協力による学習の展開も「総合的な学習の時間」と関わって大きな課題となっている。こうした学校の取り組みについての理解を図るのも重要な保護者や地域への働きかけとなっている。[注2]

和歌山市内小学校教頭会教育課程部会では、市内の教頭を対象に総合的な学習に関わってのアンケートを０１年６月に配布・回収し、集計を行っている。小学校教頭会では、この集計を元に、各学校での問題点を出し、９月に新教育課程についての研修会を持っている。

小学校教頭会での総合的な学習についての課題と

なった点は①英語の学習、②ボランテイア教育、③人材の確保、④評価の４点である。この研修会では、課題についての取り組みをすすめるため、すでに取り組んでいる市内の小学校の取り組みから学ぶという研修会を開催している。その観点は、①時間割計画（モジュール制を中心として）②ノーチャイムの取り組み③英語の学習の３点である。これらは教育課程編成上の問題であるが、いずれも、総合的な学習の時間に関係する問題でもある。

そこで、本プロジェクトでは、総合的な学習に関わる学校での取り組みの現状と課題を把握するためのアンケートを実施した。

総合的な学習に関する調査

対象　　和歌山市内小中養護学校＊2
期間　　２００２年３月１５～３１日
方法　　郵送配布・郵送回収

	配布数	回収数	回収率%
小学校	57	22	38.6
中学校	21	8	38.1
養護学校	6	2	33.3
合計	84	32	38.1

＊1

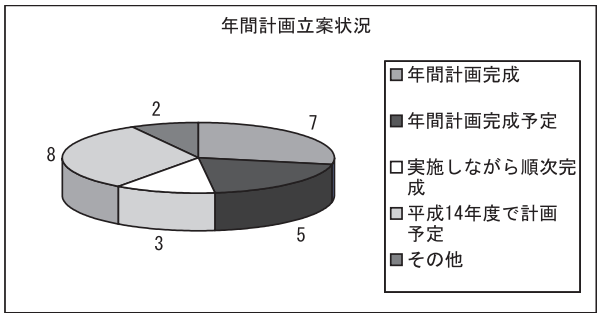
＊１）中学校回答のうち分校１は「該当無し」のため集計に入れない
＊２）学校は公立校＋和大附属３学校

３．アンケート集計と分析

ここでは、小学校のアンケート集計を扱う。注3

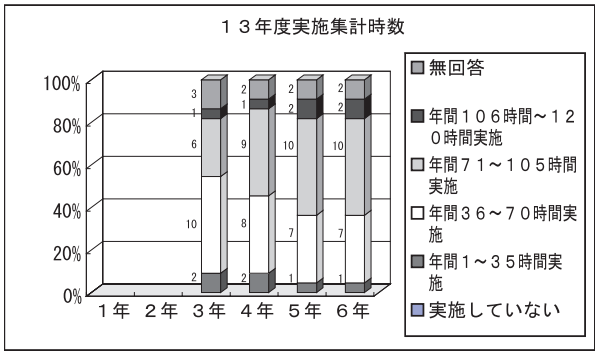
問１　１４年度年間計画立案（22 校）複数回答

年間計画完成	7
年間計画完成予定	5
実施しながら順次完成	3
平成14年度で計画予定	8
その他	2



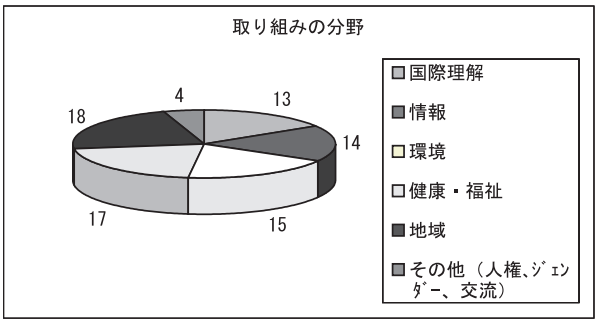
問２　１３年度実施時間（22 校）

	１年	２年	３年	４年	５年	６年
実施していない			0	0	0	0
年間１～３５時間実施			2	2	1	1
年間３６～７０時間実施			10	8	7	7
年間７１～１０５時間実施			6	9	10	10
年間１０６時間～１２０時間実施			1	1	2	2
無回答			3	2	2	2



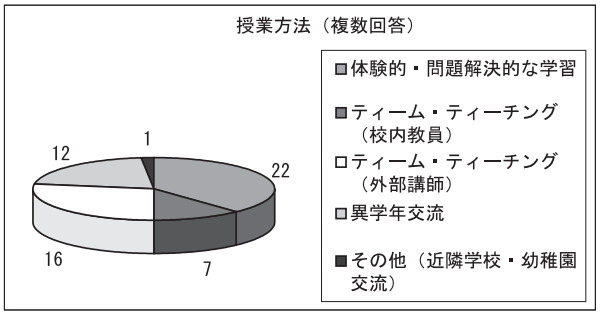
問３　取り組みの分野（22 校）　複数回答

国際理解	13
情報	14
環境	15
健康・福祉	17
地域	18
その他（人権､ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ、交流）	4



問４　授業方法（22 校）　複数回答

体験的・問題解決的な学習	22
ティーム・ティーチング（校内教員）	7
ティーム・ティーチング（外部講師）	16
異学年交流	12
その他（近隣学校・幼稚園交流）	1



問５　　総合的な学習に関わるテーマ

総合的な学習の時間を学校の取り組みテーマで見てみると、望ましい子ども像を挙げているものに続いて「地域」を取り上げたものが多く見られる。全体的な傾向としては、学習指導要領で例示された内容の一部を地域との関わりで取り上げ、体験活動に結びつけやすいものを中心に取り組むということになる。全校的なテーマ（ａ）とそれに続く学年別テーマ（ｂ）を掲げた学校に分けて整理した。

（／は学校毎の区切りを表す）

ａ．全校テーマ

〇地域に学び、地域に育つ〇〇っ子／〇ふれあいを大切にする教育／〇よりよいくらしのできる子どもの育成～生き生きと活動する子どもを求めて～／〇豊かな人間性を育む体験学習の創造／〇「地域とともに輝く子」をめざして／〇一人一人の子どもの個性を生かし、自発的・自主的に活動できる子どもを育てる／〇福祉（ボランティア）、環境／〇地域の自然や人物について関心を持ち主体的にかかわりのある学習に取り組む／〇同和人権総合学習／〇周りの自然を生かした「自然と環境」、他学年との交流・お年寄りとの交流などの「交流」／〇いのち、かがやく／〇水墨画に挑戦しよう／〇自主的で創造力豊かな子ども、課題解決に向け協力して取り組む子ども（体験活動：仲間づくり、栽培活動、情操教育、地域の文化や社会に触れ合う活動、英語に親しむ）／〇私たちの地球（赤十字集会を契機として障害者の理解、介護施設のお年寄りとの交流、隣の国を知る、英語コミュニケーション、土作りと花、野菜の栽培、パソコンを使って）

ｂ．全校テーマと学年テーマ

（表の中の〇〇は地域や校区名）

全校テーマ	１年	２年	３年	４年	５年	６年
①学び	自分のふるさとを知ろう	すてきだよ、私たちの町	見つけよう、〇〇地区のひみつ	周りの人々、自然とのかかわり	豊かな生活を創造しよう	過去から現在そして未来へ
②地域を、地域から、地域へ	－	－	地域探検	校内の自然、独居老人との交流、地域の民話調査発表	地域の施設と交流、盲学校の通学生・留学生との交流	ホームページで校区を紹介
③ －	－	－	私たちの町探検	住みよいくらし	自分たちの生活とのかかわりを考えよう	世界にはばたけ〇〇っ子
④自ら課題を見つける力をはじめとする子どもにつけたい力を追求	－	－	自ら学び共に伸びる	体験から学びを広げる	体験から学び共に高めあう	みがき合い個を高める
⑤子どもの問題意識を育てる学習のあり方～自分の思いや考えを表現できる子に～ふれあい、自然・人々、自分づくり	～となかよし	～へのひろがり	～をさぐろう	～との対話	～への挑戦	～への創造
⑥どの子にも豊かな学力を～自ら課題を見つけ働きかけ学び取ろうとする子どもを育てる	生活科で	生活科で	地域を意識して	福祉	環境・国際理解	情報
⑦人権意識をしっかり持てる子どもを育てる（自分発、自分着）	－	－	見つけたいいこと教えちゃお	やさしさ体験！大発見！	いいな、いいな自分、友達そして人間	出会い、ふれ合い、学びあい

問６　単元構成やカリキュラムの特徴

単元構成をするときの基本的なことや、重視していること､大切にしていること等を記述式で回答を得た。そのことが学校におけるカリキュラムの特徴になると考えた。ここでは､具体的な取り組み内容（米づくり，注連縄づくり、英語会話、パソコン操作、アイマスク体験、等）にもふれながら、体験活動重視の方向性が重視されていることがわかる。社会科や国語科などの教科学習の発展としての位置付けをしている学校も少数ではあるが見られる。さらに、基礎学力の充実という観点から反復習熟にこの時間を位置づけている学校もあるが、「子どもの学び」という観点からの検討が必要であろう。

- ○　単元構成の基本としては、活動領域では、環境･情報･福祉（ふれあい)･健康（生命)･国際理解･地域学習をとりあげること、活動の様態では①調べる（調査探求することのおもしろさを味わい問題解決のよりよいあり方に目を向ける）②表す（発表、制作、体験を通して自己実践する）③つなぐ（学校と地域を結び、自分も他もともに生きる）の３点である
- ○　人の出会いを大切にする／地域に出かけ、地域を再発見する／自分自身を好きになる
- ○　地域を中心に地域のよさを地域の人とのふれあいの中で見いだし自分たちもそれを守ろうとする心を育てる（3 年）／福祉施設での交流を通し、高齢者に対し温かい心を養う（4 年）／米作りを中心に地域の人々の生き方を学ぶ。英語に親しむ＜日常会話＞（5 年）／注連縄作りを通して、日本の文化に親しむ。自分たちで番組づくりをする、パソコン操作になれ、自分の表現力を高める（6 年）
- ○　体験的・問題解決的学習を多く取り入れる（公園清掃ボランティア、ミミズによる土作り、ケナフや野菜の栽培、ガイドヘルプ体験、留学生との交流など）／ゲストティーチャーを招いて専門的な学習をする／他教科との連携を深める（パソコンを使っての発表など）
- ○　子ども・学校・地域が輝くように
  国際理解・環境・福祉・健康を地域や学校の課題との関連で体験活動を盛り込みながら実践／集会を総合的な学習の発表の場として位置付け工夫していく
- ○　教科とのかかわりで活動を創造する／地域の特色を生かし福祉交流・歴史学習に地域の講師を依頼する
- ○　栽培活動、環境又は国際理解、学級独自の取り組みの３本柱ですすめる／当該学年に応じたカリキュラムを作成し総合的時間を展開する
- ○　校区にある池を見学し、それをもとに渡り鳥や生き物について調べる。／校区にある養護施設との交流を年間にわたって進め、計画的に取り組む。／全学年を通してペアー学年を組み，異学年交流をする。／ビオトープ作りをはじめて池をつくり生き物の観察をする。
- ○　「それ行け調べ隊」として、地域学習（３年）／川の水をテーマに年間を通して取り組む（４年）／体の不思議、ボランティアなど（５年）
- ○　国語科の発展として、視覚障害者のための町中の工夫を調査、市の福祉施設訪問、話を聞く、アイマスク体験、盲学校の先生をゲストティーチャーとして迎える、学習発表会で全校児童保護者に向けて発表
- ○　教科の発展とボランティア活動を中心に／昔の暮らしや地域との関わりで（３年)、郷土の住みよい暮らしから環境へ、リサイクルや紙漉体験（４年)、米づくりをテーマに、インターネットで世界の米へと広げる（５年)､歴史では熊野古道・地域性を活用し、歴史に詳しいゲストティーチャーを招いて進める（６年)、全校では縦割りを考えた総合を週１時間確保し、郷土を素材に地域探検を行い「どうしてお地蔵さんが多いの？」マップづくりなどに取り組む
- ○　小規模校のメリットを生かし、地域の老人や保育所との関わりを重視した単元構成
- ○　ＡＬＴとともに英語を学ぼう。ゲストティーチャーを招いて学習しよう、アイガモ農法で米づくりをしよう、老人ホームを訪問してお年寄りと交流しよう
- ○　地域を題材に広め、民話や地区施設を中心に活動を進めた
- ○　校区探検, 木之本八幡宮祭への参加､昔探検（３年)、それいけ環境調査隊（４年)、花いっぱい作成（５年)、外国調べ、留学生とのふれあい、日本人学校との交流（６年）
- ○　すばらしい〇〇（３年)、ケナフのふしぎ（４年)､環境探検（５年)､〇〇地区歴史探訪（６年）
- ○　地域に根ざした教材開発（川で育つ植物や水質の追求、ゲストティーチャーの人材確保と活用、地域の産業理解）
- ○　朝の１０分間読書タイム（平成１３年度のみ)、基礎学力の取り組みとして算数の百マス計算と国語の漢字進級テストプリント

問７　特徴的な子どもの学びの姿

総合的な学習が積極的な意味を持つのは、学校における「学びの姿」の再検討を迫ったからである。文部省の学習指導要領での「総合的な学習の時間」の総則への位置付けについては多くの意見がある。「総合的な学習の時間」が創設される経緯の中で現在の学校教

育のあり方・授業特に教科学習のあり方への問題意識の整理についても一方的な見方が多く含まれてはいるものの、重要な指摘を行っている。また、「学校知」という枠組みや「方法知」「内容知」という関係で論議するというなかで、「総合的な学習の時間」はその目標と内容が大きな関心を集めた。文部省は位置付けや「ねらい」を示し、内容や方法は、先導的試行に取り組む文部省指定校の「実践事例集」をもって具体的な取り組みの参考を示した。

ここで、「子どもの学び」が課題となる。子どものどのような力を引き出し伸ばすのかという評価そのものでもあるが、子ども自身の変容をどのような「体験的な活動」を経ることによって図り、その結果をどのように把握するのかという重要な課題である。今回のアンケートでは、学校単位という抽象度の高いレベルでの調査となったが、以下のような具体的な子どもの変化・変容を教師が「見取って」いる。

- ○ 子どもが生き生きと活動する。自分の課題についてとりくむため、意欲的であり、課題がつぎつぎと生まれる子どもがいる。
- ○ 子どもなりに試行錯誤を繰り返し、主体的に活動できる子が多く見られた。
- ○ 地域のすばらしさに気づく子、日本・地球へと広がりのある問題意識を持つ子が増えた。
- ○ パソコン導入と地域の具体的教材の活用によって学習活動が活気づいた。
- ○ はじめは何をどうしていいかわからない子どもであったが、やっているうちに自主的に工夫して活動し出す姿、老人・留学生など交流した人たちの暖かい反応に感激する姿があった。
- ○ ゲストティーチャーとして地域の人を呼び、交流したことで、家庭においても交流するようになった。
- ○ アイガモ飼育により、子どもたちに生き物を大切にする心が芽生えてきた。
- ○ 一つの活動が一つにおわらず、次の活動へとつないでいくようすが見られた。
- ○ 一人ひとりのテーマに沿った地域学習の内容を、それぞれが「ＣＤ」にまとめ、思い出の自分だけの「ＣＤ」を作り上げた。普段の学習や活動の中で気軽にパソコンを使うようになり、インターネットやメールへの挑戦をおこなったりして、関心を深めている。
- ○ 本時意識をもった発表にということから、低学年にはクイズを取りいれたり言葉を考えたりする姿が見られた。
- ○ 学習内容について家庭内で話題になるのか、保護者からの感想などを聞ける機会となった。
- ○ 生き物の特徴などを、インターネットで調べたりする子どもが出てきた。
- ○ 障害のある子どもと交流する機会が多くなり、相手のことを考えた計画を立てたり、相手をいたわる気持ちが育ってきている。
- ○ 名前も知らない魚などを図鑑などで調べ、文章にまとめ発表するようになった。
- ○ 各学年ともおおむね「学ぶ喜び」を感得し、満足気であったといえる。
- ○ 調べる力、まとめる力、読む力、人の気持ちを考える力、がんばる力、実行する力、したいことを進んでする力、アイデアをたくさん使う力、集中力などが付いたと子どもが自己評価している。（５年生の年度末アンケート）
- ○ パソコンと親しむ学習において機器活用を大変喜び、また、巧みであった。
- ○ ３年生においては、地域を知る活動が大変活発であった。
- ○ 交流活動（なかまづくり）が徐々に盛り上がりをみせ、次年度が楽しみである。
- ○ 涙、笑顔、疑問など子どもの心が動かされている場面が多く見られた。
- ○ 達成感・成就感がみられ、次への課題設定が子どもたちの中からできてきた場面も見られた。
- ○ 地域の方々が、ゲストティチャーとして子どもたちとふれあう時間を持った後、心と心のつながりができてきたようである。
- ○ 新しい課題に自ら問題意識を持ち、生き生きと活動した。
- ○ 各自が取り組んでいる課題について学校だけでなく、家庭や地域においても、積極的に情報を集めたり、実践したりした。
- ○ それぞれの学習を契機として、これからも意欲的に学んでいこうとする態度が育った。
- ○ 交流や体の不自由さの体験により、高齢者に自然とやさしことばがけができるようになった。
- ○ グループ内での役割の分担ができ、持ち味を出して交流できた。
- ○ 番組づくりでは子ども独自の活動がみられ、いままでのテレビに対する見方が変わってきた。
- ○ 地域を五感を通して調べることにより、自ら地域に働きかけ、話を聞く態度も養われた
- ○ 学習に対する関心・意欲が高まり、楽しく表現活動に取り組んだ。
- ○ 納得できるまで体験することや探求することの楽しさおもしろさを知ることで真剣に活動に取り組んだ。

問８．学習環境の整備

学習環境の整備に限って、取り組んだこと（ａ）と課題（ｂ）に分けて整理した。課題（ｂ）となることは、問１１の「実施にあたって困っていること」と重複す

ることが多く、それだけに実施にあたっての環境整備の面での遅れが目立っているということである。より端的に言えば、各学校においては、予算的な裏付けがほとんどなく新しい体験的な学習を強調した取り組みを「工夫」して行わなければならないというのが実情である。特に、ゲストティーチャーなどの講師招聘をボランティアに頼らざるを得なくなるという点も地域の人材活用の面から考えても、やりやすい学校と不可能な学校があるように、一律ではない取り組みを前提にした予算措置を積極的に図らなければならない。

ａ．学習環境整備で取り組んだこと

○　自由に調べ学習できる図書コーナー・学習室の設置／新しい飼育小屋の設置（生き物の種類を増やす）／花いっぱい運動に参加し、積極的な花をふやす／子どもが自由にパソコンを使える時間を増やす／ケナフ栽培のあと土地がやせたため、土づくりをした／単元にあわせて教材をそろえるよう心がけた／子どもの必要感に迫られた手作りのものができるよう、単元の流れを工夫した／次年度に生かせるように取り組みでの作品などを保管する場所や掲示のための工夫をした／地域人材バンクづくりを進めた。

ｂ、学習環境整備上の課題

○　学校に足を踏み入れた人が、何をやっている学校か、開かれた学校であるか等、その学校の特色がわかる学校であるようにしたい／地域の教材化をどう進めるか／子どもの学習の場の広がりと安全の確保／費用の負担／図書室の整備／メディアルームの整備／学習の場の設定／地域教材開発のため、地域の様子を深く知る機会や研修の必要性／パソコンの台数不足／調理や、活動などの費用の不足／講師の移動手段の確保（留学生など）

問９　総合的な学習に関わる校内研修体制

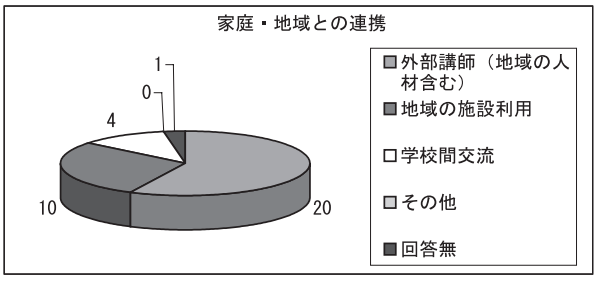
総合的な学習の実施にあたっては、「Plan － do － see」の考え方によって、実行したことを見直し次の計画を立てるという必要がある。そのためには、校内に「検討」する組織を恒常的に設置しておかねばならない。日常的に子どもの学びの姿が明らかにされている必要がある。それは変化するものであり、子どもも含めて、保護者や教師にもさらには、地域にも開かれたものでなくてはならない。

ここでは学校による様々な工夫があり、現職教育を含んだ教員研修にも位置付けながらすすめようとする姿勢が伺われる。移行期だけでなく、今後も継続して取り組まなければならない具体的な指摘である。

○　立案した年間計画をもとに、各学級・学年で実践し、教職員で交流したり、異学年で交流したりする／総合学習部会を設けてはいるが、現職教育への位置付けが弱く、来年度より整備・強化する予定である／研究授業を年３回開催している／現職教育に位置付け校内で数回研修会を持つ／低・中・高学年の３ブロックに分かれ学年だけでなくブロックとの関わりを持たせ取り組んだ／総合学習の研究主任を中心に総合部会で年間計画、評価、年度当初の計画と年度末のまとめについて話し合った／学期ごとに取り組んだ内容について話し合った／１年から６年で年間１時間の公開授業をし、そのあと全職員で協議会を持った／総合の部会を数回持ち、その都度それまでの取り組みを報告しあい、学期末ごとに、全体の場で取り組みを報告した／パソコンを使ったメール作成やインターネットの検索や校内ＬＡＮシステムなどの研修を１０時間おこなった／総合的学習研究部が立案し大きく分けて次の二つの研究を進めた。第１に理論研究で、管外研修時の資料などをもとに研究を深め、第２に、事例研究で、学期各１回の実践報告会を実施し、互いに研き合った／研究授業（市内教科別研修会・学期１回校内研究授業）、夏期研修（先進校の取り組み研修報告）、実践交流をおこなった／校内での相互研修の実施（パソコン、機器操作）、市の研修会（パソコン）にも積極的に参加した／各学期に２回、計画・まとめについて現職教育の全体会で協議し、全体のものにしつつ実践していった／学期ごとに学年での取り組みを報告、協議、反省し、軌道修正をした／研究授業を実施して研修、実践交流会・人材バンク名簿作成など実施した／総合部を設け、現職教育の柱として、計画的に取り組んだ／学年別に、テーマ・構想を作成し、各学年１実践の授業研究と協議会を持った

問 10　家庭・地域との連携（22 校）複数回答

外部講師（地域の人材含む）	20
地域の施設利用	10
学校間交流	4
その他	0
回答無	1



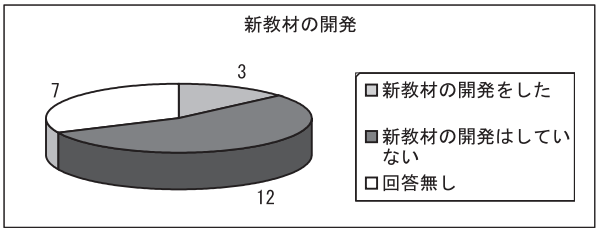
問11　実施にあたっての問題・困っていること

○　時間割編成の中での継続的な時間の確保が難しい／野外活動は天候に左右され、計画通りの実施が困難／地域学習の引率・指導の教員の確保が困難（複数回答）／ゲストティチャーの要請や費用の確保困難（複数回答）／消耗品費の確保困難（複数回答）／校外での活動の安全の確保（複数回答）／外国人講師、英語講師、ＡＬＴなどの講師の確保／広がりのある学びにつながる課題の持たせ方が難しい／子どものやる気を育てる新しいテーマの開発／地域の人材の確保／教員の「総合的な学習」に対するとらえ方の違い／地域の人が活躍できる場面の設け方／子どもにつけたい力などに関わる評価の研究／ねらいを達成するための適切な指導・支援のあり方／教師の教科の特性についての理解度に大きな差がある／大規模校における時間の確保や活動の場の確保

問12　移行期間中の新教材の開発（22校）

新教材の開発をした	3
新教材の開発はしていない	12
回答無し	7

新開発教材のテーマ内訳
○老人ホームとの交流
○地域の田での米づくり
○ケナフの栽培と紙づくり
○漬物工場見学と漬物づくり



４、学びの質

２００２年３月、総合的学習プロジェクト会議で「学び」についての検討を実践報告をもとにおこなった。総合的な学習としての「学び」とは何かというテーマのもとに、まず、和歌山大学附属小学校石本先生の実践「トリストーリー」－３年－（命の学習）の報告を受けた。[注4]

石本実践を支えるキーワードは「共同性・主体性」であり、実践の特徴は①課題をとらえる話し合い活動を重視すること、②話し合いの結果としての活動は、子どもの意欲に任せるというものであった。この実践を通して、子どもが学んだものは次の二つである。

第１に、子どもの日常生活での行動（トリの世話）を判断基準とする子ども相互の話し合いが、「生活の文脈」から討論を進めることによって高められ、「思考」や「思想」的なレベルで課題になるという展開が、可能となったことである。これは、教科学習におけるユニークな意見や興味を引く意見等とは違うレベルの問題であり、この実践を通して、それぞれの子どもの意見に対する評価が子ども相互で行われるといった、価値観の形成につながる討論が展開できたことである。

第２に、話し合い活動による「行動の意味づけ」をおこなったことである。納得を原則に行動を組織することにした。このため、非常に多くの時間が費やされた。尚かつ、「共同」を追求するが、その中でも、子どもの全員の意見の一致を見るのは困難であったということがある。

次に、附属養護学校の大谷先生の高等部での取り組み「社会体験学習」の報告を受けた。[注5]
大谷実践を支えるものをキーワードで示すと「ボランティア体験学習」「『場』の教育」となる。この実践の特徴は次の２点である。

第１点は、教師が支援者としてボランティア活動全体の積極的なコーディネートを行なったことである。具体的にいうならば、「外部人材に関わるコーディネート」「各時間の展開に関わるコーディネート」「授業時間内の『予想外の新しい展開』にかかわるコーディネート」であり、各段階での支援が有効に働くとき「学び」が成立するということが発見できた。

第２点は、ボランティア活動における「交流」場面での子どもの変化である。従来の「教師対生徒」「生徒対生徒」の関係ならば、パニック状態に陥る二人が、「場の力」によって、新しい対応関係を創り出した。このことをもって、子どもの学びが成立したと言えるのではないかという指摘である。

大谷先生は、この時の子ども（生徒）のようすをビデオで紹介しながら報告され参加者は感銘を受けた。

ここでは２事例しか取り上げられなかったが、実践に基づく事例の分析は、非常に重要である。アンケートなどの方法ではつかみきれない子どもの『学びの姿』を写し出している。日常的に学校における現職教育に位置づけて検討を加え教職員全員が学んでいくという取り組みをこそ大切にしなければならない。

この姿勢は評価と関わってますます重要視されなければならない取り組みであると考えられる。[注6]

５、小学校英語活動の課題

小学校における「総合的な学習の時間」の取り組みの柱のひとつに、総合的・横断的な課題として『国際理解』という例示がある。この具体的な内容に「英会話」を中心とする「英語活動」の実践が多くの学校で

取り組まれている。社会的な要請としての英語の話せる日本人の育成は、中学校からの英語教育のあり方に疑問を投げかけ、新しい取り組みが進められている中で、小学校における「英語」にも注目が集まっている。

そこで、本プロジェクトでは、小学校「総合的な学習の時間」における国際理解教育としての英語活動に関するシンポジウムを開催し、英語活動についてのあり方を幅広く検討した。

２００３年３月５日、和歌山大学教育学部附属教育実践総合センターを会場に、「総合的な学習の時間」（１９９８年版-2002.4. 実施-学習指導要領）の設置の趣旨や「総合的な学習の時間」で期待される子どもの「学びの姿」にふれ、「国際理解」教育の一環として展開されている小学校の「英語活動」を取り上げた。「英語活動」は、重点の置き方の違いによる多様な展開が小学校でされていることを確認し、英語教育との関わりで課題も生まれていることなどシンポジストや参加者から継続的な研究・交流の場が必要なことを確認し合った。[注7]

一方、教育政策として、和歌山市市長の教育問題についての政策提言委員会が設置されその中で、市内全小学校に外国人講師を配置して、英語教育を推進する（2003.1.16 朝日新聞）ことをうけ、和歌山市０３年度予算案で「教育パワーアップ」として外国人講師１，２人を市内の小学校に派遣するという「小学校英語教育推進」費を４００万円計上している。(2003.2.18 朝日新聞）また、和歌山県の予算では、小中一貫で英会話教育として、小３から中３まで一貫したカリキュラムに基づく英会話学習の先駆的実施を（中学校区で４地域を指定：年間６０時間）するというイングリッシュパワーアッププログラムが 1311 万円の予算で(2003.2.11 朝日新聞）が進められようとしている。

こうした中で、実践を整理し、検討し新たな実践を創出する必要性があり、今後もシンポジウム開催等を通じて検討を進めなければならない。

本稿では、小学校における「和歌山市内での総合的な学習」の取り組みについて検討してきたが、２００２年４月からの新学習指導要領に基づく教育課程の実施に際して、総合的な学習についていえば、十分な検討がされているとは言い難い側面があり、実践記録[注8]をもとにした子どもの学びの成立という観点からの検討が待たれているところである。また、小・中学校でいえば、中学校での実践的課題が大きく、教科担任制の中での選択教科の実施と関わってより複雑になっている。

注　記

１）文部省は移行措置の期間に全国の指定校の事例を実践事例集として発刊しているが、各地域における取り組みの数量的な統計はほとんど見られない。
文部省『特色ある教育活動の展開のための実践事例集－「総合的な学習の時間」の学習活動の展開－（小学校編)』１９９９

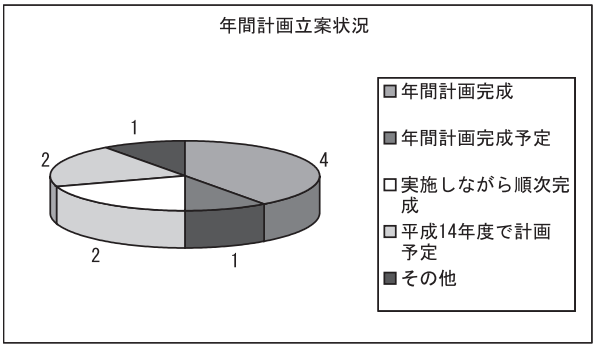
２）総合的な学習の時間では体験学習やゲストティーチャーを招いての授業など、地域との関わりを重視した取り組みが展開されている。

３）中学校については問１～４及び問１０についての集計結果をあげておく。

中学校全８校

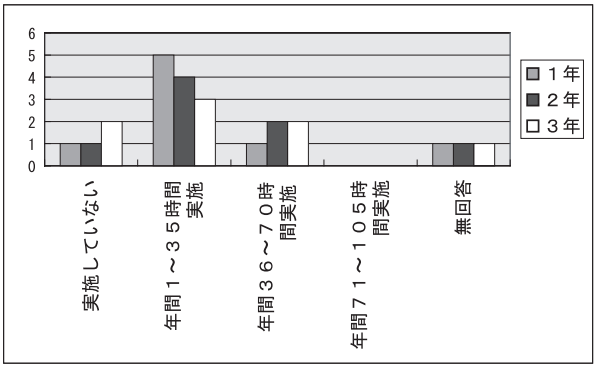
問１　１４年度年間計画立案（８校）　複数回答

年間計画完成	4
年間計画完成予定	1
実施しながら順次完成	2
平成14年度で計画予定	2
その他	1



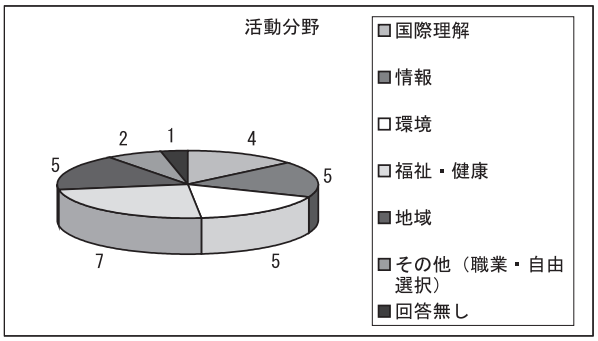
問２　１３年度実施時間（８校）

	１年	２年	３年
実施していない	1	1	2
年間１～３５時間実施	5	4	3
年間３６～７０時間実施	1	2	2
年間７１～１０５時間実施	0	0	0
無回答	1	1	1



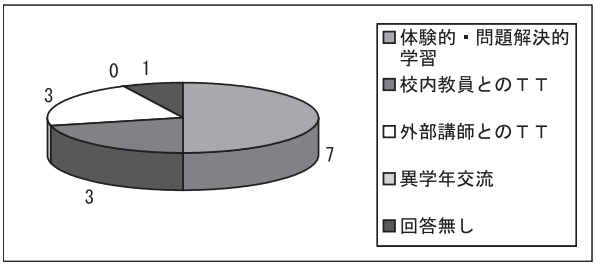
問３　平成１３年度取り組みの分野　複数回答　８校

国際理解	4
情報	5
環境	5
福祉・健康	7
地域	5
その他（職業・自由選択）	2
回答無し	1



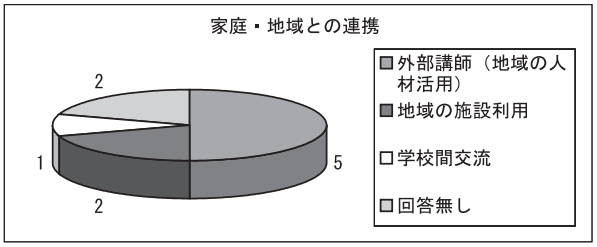
問４　配慮すべき事項（８校）　複数回答

体験的・問題解決的学習	7
校内教員とのＴＴ	3
外部講師とのＴＴ	3
異学年交流	0
回答無し	1



問10　家庭・地域との連携（８校）　複数回答

外部講師（地域の人材活用）	5
地域の施設利用	2
学校間交流	1
回答無し	2



４）和歌山大学教育学部附属小学校『平成１３年度第２回教育研究発表会　わたしの学校』２００２年２月５日ｐ１００－１１１及び「３年Ｂ組トリストーリー本時案」、和歌山大学教育学部附属小学校『紀要第２６集』２００２，ｐ４１－５１から実践の様子や子どもの学びが考察されている。

５）２００２年３月の総合的学習プロジェクト検討会配布のレジュメによる。

６)国立教育政策研究所教育課程研究センターより『総合的な学習の時間実践事例集』（小学校編）２００２年が出版されている。スペースの関係もあり「子どもの学び」という点からの考察は弱い。

７）和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター主催の「小学校＜英語活動＞に関するシンポジウム」は小学校の「総合的な学習の時間」における国際理解教育としての英語活動を取り上げた。基調提案（和大、川本プロジェクト代表）に続き、「英語が苦手な教師の英語活動」について城北小の鈴木教諭から実践報告を受け、小学校の英語活動について県教委喜多指導主事、「和大英語科担当者からの問題提起」として江利川助教授から報告を受け、和大の林教授のコーディネートによって進めた。

８）アンケート回答校の実践で、総合的学習に関する実践記録（２００２年３月現在）には、以下の学校等で記録（冊子）が発行されている。（アンケートによる回答より作成）

- ○　宮小学校『あすを切り開きあすに伸びる力と豊かな心をもちたくましく生きる子どもの育成』（平成１３年３月発行）
- ○　宮小学校『あすを切り開きあすに伸びる力と豊かな心をもちたくましく生きる子どもの育成』（平成１４年３月発行）
- ○　西和佐小学校『２００１年度実践記録集』（２００２年３月発行）
- ○　和歌山県人権教育研究会『わかやまの人権教育』（２００１年３月発行）
- ○　楠見小学校『どの子も豊かな力を』－平成１３年度－（平成１４年３月発行）
- ○　新南小「学校のまとめ」（校内用参考資料）平成１３年度
- ○　雑賀小学校『１３年度実践記録』
- ○　安原小学校『現教の取り組み』
- ○　宮前小学校『宮前の子どもとともに』
- ○　山口小学校「学校のまとめ」（考察なし）
- ○　小倉小学校『現教のまとめ』（平成１４年３月発行）

○　三田小学校『豊かな人間性を育む体験学習の創造』（２００２年３月発行）
○　名草小学校『自ら学び、主体的に活動する子どもを育てる』（平成１４年３月発行）
○　今福小学校　（詳細不明）
○　広瀬小学校　（詳細不明）